

論文要旨

東京藝術大学大学院研究科博士後期課程

研究分野: グローバルアートプラクティス

木戸龍介

空気を彫る

—無数のヴォイドによって流動化する彫刻—

本論は「Voids Sculpture」という新たな彫刻の概念を設定し、その概念と手法、そしてそれによってもたらされる新たな彫刻の思想的な位置付けと可能性について論じるものである。この「Voids Sculpture」は論者が長年取り組んできた手法のひとつで、既存のオブジェクトを彫り込み多数の空隙(ヴォイド)を産み出す表現である。多孔体のような内外部の貫入が可能で領域が曖昧な存在に変容させることで、それ自体の意味、社会的存在、物質的存在、価値などの課題を浮かびあがらせる。これは伝統的な構築的彫刻の手法よりも、現代建築における脱構築論に基づく方法論に近い概念・手法である。

本論ではさらに「Voids Sculpture」が含有する「空気」の所在と、この手法の目指す「空気を彫る」ことに関して論じる。「空気」は空間の構成要素でもあると同時に、空間を構造化もする。様々なオブジェクトに彫り込みが広がり、それが発生させる無数の空隙は作品の内外を混在化し「空気」を内包し流動化させ、その結果彫刻が鑑賞者の意識と現実の社会の中で動き出すことになる。この手法がいかんにして「空気を彫り」、「社会の内面性」に関与することで風景を変容し得るか論考する。

この概念の中心となる作品は、論者がタイで制作した椅子や米倉を彫った《Inner Light シリーズ》の作品群である。それはタイの階層的な社会構造の形成する「社会の内面性」が日本と同様に「空気」として存在し、またそれがタイ社会を環流することで社会構造をさらに固定化しているのではないかという想定のもと、タイにおける「空気」をどのように観察し、触れ得るか実践を試みた。

まず木の椅子を彫った作品《Inner Light- A Thai Wood Chair from Ms.SS-》と、タイの街中で集めた使い古されたプラスチック製の椅子を彫った《Inner Light- Thai Public Chairs-》で扱った椅子はそれぞれにタイでの社会的な立場や世代によってその意味合いが変化し、これらを一つの物差しとしてタイ社会の観察ができる存在である。一般的に椅子は玉座に代表されるように、それ自体が古来から権力の象徴であった。現代でも椅子自体に多様な背景を読み取れる。椅子だけが置かれたとしても、その空席はそこに座るべき人間の存在を暗示する表象ともなりうる。論者はこれらの椅子を彫って作品化することで、変化するタイの社会通念や社会構造が抱える問題を具現化できると考えた。彫るという、ある意味で破壊とも言える行為が椅子の構造を侵食して崩壊させ、鑑賞者がもはや椅子ではなくなった存在に見つめ返されるという風景を描き出すこ

とになった作品は、そこにあらたな価値と視点を生み出してタイで予想を超えるインパクトを持って受け取られた。

また、タイランドビエンナーレ2023で制作した作品《Inner Light- Chiang Rai Rice Barn-》では、タイの代表的農産物の米の備蓄に使われていた米倉を彫った。現代のタイにおいてこれらの米倉は本来の用途と社会での役目をすでに失っているが、タイの貧農やそれを使役する階級という階層的な構造を象徴する存在としての記憶をとどめている。彫られたことで生ずる空隙で米倉が「備蓄」の構造を失いながらも、空気や光が出入りし始め、タイの社会構造を自由に透過する視点を生み出す作品となる。

「Voids Sculpture」は論者が社会における彫刻表現の役割について様々な媒体や表現方法で模索してきた中の一つの到達点だが、並行して制作してきた他の作品群と相互に影響しつつ成り立ってきた方法である。関連性が乏しいとも見える筆者の作品群に共通しているのは「空気を彫る」というキーワードである。「空気」という言葉には多面性があり、「空気を読む」という言葉にあるように様々な文脈から状況を察知する意味にも使われ、時に我々の行動を制御し得る権力構造にもなり得る。我々は常にこれら視覚的にも観念的にも様々な「空気」の層を通して対象を見て、概念化している。したがって「空気を観察する」ということは「社会の内面性」を観察することでもあるし、作品表現による「空気」の顕在化と変容は他者の認識や風景の表出への介入をも可能とする。

以下に本論の構成を述べる。

第一章では論者が今まで取り組んできた3シリーズの作品を取り上げて、素材と行為の持つ意味、作品内における価値の反転と共存、他者の風景へのアプローチという課題を明らかとする。

第二章では、第一章で明らかとした課題を第三章の「Voids Sculpture」の概念と手法へ収斂させるための論拠と概念を検討する。特に建築における脱構築理論やヴォイドを取り入れた思想と試みに照らし合わせて、彫刻への応用の可能性を検討する。また、「空気」が作用して生まれる風景の創出について述べる。

第三章では過去の《Inner Light シリーズ》の作品群の試みを明らかにした上で、博士提出作品それぞれの作品の背景、素材と表現方法が象徴する意味について詳細に検討する。そして、これらの作品がどのようにタイの社会の内面性を顕在化し、またタイ以外においても新たな視野を創出し得るか検証する。

結論は、現代社会において「Voids Sculpture」という論者の手法が彫刻に空気を内包し流動させることで彫刻が動き出し、現代社会の人々の内面性を顕在化し、新たな「風景」をいかに描き出し得るかを論述する。